
脳天気娘

めぐたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳天気娘

【Nコード】

N2127A

【作者名】

めぐたん

【あらすじ】

神野真琴はお菓子が大好きな女の子☆彼女はある日屋敷のメイドとして働くことになります☆そこにはきれいな人たちがいるのですが真琴はおかしに夢中で眼中にありません☆彼女はだれとハッピーエンドとなるのでしょうか？？

面接

家に居たくない。

別に親が嫌だとか居づらいという訳じゃなくてこの年頃だから思うのかもしれない。

親から離れて自由に気ままに違う世界を味わう。そう例えるなら：流浪人？？。

春になれば美味しい団子を食べに夏にはスイカを秋には焼きイモだな。

冬は鍋が食べたいかも：今年はちゃんこが食べたい。ああいいなあ

「おい！！！！！！」

「へ？。」

「あのですね。春夏秋冬。どれも今のご時世ならいくらでもできる事です。それに流浪人だからといってあなたみたいに食べ物中心とは限りませんよ。あなたはせいぜい食いしん坊万歳の方が当てはまると思います。」

「ああ。そう！それ食いしん坊万歳！あれがいいなあ。」

「あのですね：」

カシノマコト

そう私。神野 真琴20歳は只今バイトの面接中。そして私が一人で妄想族へと行きそうなところを一喝し只今説教中のこの人、小崎進。オザキン年齢は知る訳がない。えっ！？名前はなんで知ってるかって？

それはさっき面接する前にこの人が自分から名乗ったからだもん。見た目顔立ちがきれいで眼鏡かけてるけど目が切れ長で肌が白くて背も高くて：最初は見とれちゃったけど話すときびしいお人で：。

そこ行儀が悪いだの、今のと言葉遣いが悪いだの、身だしなみがどうだのって何様なのさっ

「聞いてますか？」

「えっあっはい。」

「…。」

小崎は席から立上がり真琴に近付いて肩に手を置くと

「聞いていなかった様ですね。」

真琴の体全体から冷や汗が出て来る。

「そんなことはないです…はい…。」

真琴は声がうらがえりながらも話すが、小崎は眼鏡をはずすと、

「嘘つきは嫌いです。どうやらあなたにはおしおきが必要みたいです
すね。」

ビクッ

小動物の様に真琴の体は反応したのだった。

おしおき…おしおきって何をする気なんだこの人は…。

「は…!!…!!…!!…!!?」

真琴は一瞬悲しい過去の思い出を思い出した。

そうあれは私が小学生の時学校の帰り道で知らない男の人が声をかけてきたのだった。

「お嬢ちゃん。ここら辺で〇〇町わからないかな。おじさん迷子になっちゃって」

スタスタスタスタ

「って無視かい!?!」

真琴は何ごともなかったかの様に通り過ぎたのだった。男はあわててポケットの中にあるお菓子を袋から取り出すと

「お嬢ちゃんこれあげるから…。」

「何!?!? どうしたの?」

「ってはや!?!?!」

真琴はお菓子につられ男に誘拐されそうになったのだった。

たまたま近くを通りすぎた近所のお兄ちゃんが助けてくれたから良かったものの危うく連れてかれるところだったのだ。

帰ってから親から説教された上にもらったお菓子まで取り上げられ
拳句の上には一か月おやつ抜きにされたのだ。

あんな思いはもうごめんだ。お菓子のない人生は米のない食事以上
痛い。

「ごめんなさい。」

真琴の目から涙がこぼれ落ちた。

「ごめんなさい。もうしないから。許してください。」

突然の真琴の涙に小崎は驚き、真琴の頭を優しくなでながら

「なにも泣かなくてもいいんですよ。あなたがそこまで反省しているならもういいませんから。明日からお願いますね。」

真琴は涙をふきながら小崎を見る。小崎は優しいほほ笑みで

「採用します。」

「おしおきはなしですか?。」

小崎は眼鏡を掛け直し

「なしですよ。」

真琴はその言葉を聞くと表情がパアツと晴れやかになったのだった。愛らしい顔に小崎は自然とほほ笑むのだった。

採用されたことよりもおやつ抜きのことになしになったことの方が今の真琴には頭になかったのだった。

面接（後書き）

初めての作品です^^おもしろいといいいのですが・・・。

よかったら投票のほうお願いいたします☆

また続きが気になる方や励ましのメールなどいただけると
励みになりますのでお願いいたします。

夢の為の第一歩

時給1000円。時間帯6時～23時まで。年齢18以上。
仕事内容まではみていなかった。

時給1000円を見て年齢も当てはまり気がついた時には即電話していたのだ。

仕事内容はまだわからない。

とりあえず、その前に私はもう一つのバイトを終わらさなければならぬ。

昨日採用された時点で仕事が二つになったのだ。要するに、

「かけもちだど？」

「うん。」

只今私はもう一つのバイト。

仕事内容はこの人、近所のお兄ちゃんヨシナガケイで吉永慧。
職業、小説家。

長い黒髪を一つに結び、目が鋭くそばにしていると威圧感を感じる…顔はきれいなのに勿体ない。ん？どっかのやつと似てるな。

慧は徹夜付けで小説をこなしたので今すこぶる機嫌が悪いようだ。

真琴は苦笑いをしながら、

「まゝ落ち着いてよ。慧兄ちゃん。」

「これが落ち着いていられるか！」

慧は溜め息を出し

「お前は俺の仕事の手伝いをやらせているだろう。お金だっていいはず…不満なのか？」

「いや！！不満はないよ！！！」

真琴は手と首、両方を左右に振るのだった。

「じゃあどうして…。」

「慧兄ちゃん…私ね。」

「うん。」

「お金貯めて幻のロイヤルケーキ季節限定番が食べたいの。」
「……。」

真琴はうれしそうな顔をして
「テレビでも有名あのパリコレにも出た高いあのケーキ。今逃したら二度と食べれない…やっぱり一度は経験したいんだよね」

「…真琴。」

「ん？」

ガシッ

慧は真琴の肩をつかみ、真剣なまなざしで、

「真琴…お前、ふとるぞ。」

「なっ!!?」

慧は笑いながら

「まあ真琴は食べ物中心の世界だからな、俺が止めても聞かんだろう、それよりもこっちの仕事はやめる気なのか？」

「ん…やめる気はさらさらないよ。」

「ならいい。後変な男に気をつけるんだぞ。お前はちょっと目を離すと…。」

「わかってるよ」

慧は納得いかない顔をさせつつも

「じゃあなにかあったらちゃんと報告するんだぞ。」

「心配症だね…私もう大人だよ」

「知能数は子供以下だろ。」

「むむ!!。」

慧は真琴の頭をなでながら

「慧には将来ちゃんとした頭のいい旦那さんをもらわなきゃいけない。」

真琴はほっぺをふくらましながら

「どうせ貰い手が居ないとでもいたいんでしょう？」

慧は真琴のほっぺを両手でつぶしながら

「いなかったら俺がもらうよ。」

「はいはい。」

真琴は慧の手をはらいながら荷物を手に取り

「いつまでもその手にはひっかかりませんよーだ。じゃあいつて来ます」

慧は手を振り

「いってらっしゃい。」

真琴は出ていってしまった。慧は振った手を口元にあて

「案外冗談でもないんだけどな…。」

とぼそっとつぶやくのだった。

夢の為の第二歩（後書き）

登場人物の人格を決まるのに悩みました。

わかりにくかったらごめんなさい。

こんな私ですがこれからも宜しくお願いいたします。

前途多難

「パリコレは服じゃなかったですか？」

「えっ」

小崎はずれた眼鏡を掛け直しあきれた表情で真琴を見ていた。真琴は真剣な顔で

「でもテレビで…。」

「なんのテレビなんです…。」

「なんのって深夜3時前にやってる夜もいけてるぜ!!! 高いお買い物!!! あなたは目が離せないっ!!! 視聴率が高いといっていた番組…。」

「…。」

小崎は目を閉じ親指と人差し指で額を押さえながら黙ってしまった。採用したのを間違えたのか。

こんなにも痛い子だとは思いつかなかった。

なぜにそんな変な番組にだまされているのか…パリコレにも出たとゆうのを聞いた時点でおかしいとは思わないのだろうか。

パリコレにでるのは服だろう。

いや、それよりもなんでそのケーキを食べたい為に働くとゆうのがよくわからない。

そんなに高いケーキが深夜番組にあるわけなのでは…いや、この子の事だ、そのままうのみにしてしまったんだろう。

「小崎さん？ おーい。」

「なんです。」

小崎は眉間にしわを寄せつつも目を開け真琴は心配な表情をうかべた。

「なんかうなっていたので体調がすぐれないかと思ひまして…。」

「……」

小崎は溜め息を出すと

「神野さん。その番組はやらせですよ。悪い事はいけません。やめなさい。」

「えー!!!!!!?」

真琴は眼を全開に開き

「嫌だとかいわせませんよ。それに信じれない顔してますが断言できます。」

「そこまで…」

小崎は手を出し、

「一つ目、そこまで有名番組なら深夜にやりません。二つ目、深夜番組で視聴率がいいといってますがそれはだれが決めたんです。三つ目、有名なお菓子なら私が知らないはずはない。一応ここででのお茶菓子は数々の賞をとっている物ばかりですからね。」

「う…。」

真琴は突き付けられた三本の指にぐたつと体の力が抜け座りこんだのだった。小崎は手を伸ばし、

「そんなに落ち込まなくても…ここからでるお菓子、余りますから食べてもいいですよ。」

「え!!!!!!」

真琴の目は光り輝き小崎の手を両手で握り締め、

「小崎さん、今の話本当ですか？」

小崎はうとい表情を表しつつも真琴の手を離し、

「ただし、条件があります！」

真琴はにこにこしながら右手をあげ

「もうなんでもいっちゃってください!。」

小崎は机の上にあるファイルを開き、

「一つはさっきのやらせ番組を二度とやろうとは思わない事。なにかやる前は私に念の為に言いなさい。(なにかあってからじゃ遅いですからね。二つ目に、この仕事をやめないこと。三つ目は、私のゆう事は絶対逆らわない事。他にもありますがこれらが守られるなら毎日余ったお菓子食べてもいいでしょう。」

ゴクッ

真琴の口からよだれがでそうになったがなんとか飲み干した。
夢にも見た賞をとっているお菓子を食べられるなんてしかも無料。
真琴が悩むはずがなかった。

「やります!!!」

「じゃあこの紙にサインしなさい。」

「はい!」

真琴は紙の内容を読まずお菓子につられサインするのだった。

小崎は紙を取り確認すると、ファイルにしまい

「じゃあ、仕事内容を説明しますね。」

「はい!。」

真琴のご機嫌はもはやルンルン状態なのだった。

「仕事内容は、私の指示に従えばいいです。主にメイドみたいな感じですよ。とりあえず時間は日によって変わりますが、その都度私が指示しますから勝手な行動は謹んで下さいね。」

「わかりました!」

小崎はクスッと笑うと真琴のふわっとした髪に触る。

「髪の毛しばりましょうか。後眼鏡をかけてもらいます。」

真琴は首をかしげ

「どうしてですか?」

「仕事に支障があるからです。」

「はあ」

小崎は棚の中にある眼鏡を取り出す。

「髪の毛はともかく、私目悪くないですよ。」

「あなたは時々まぬけな顔をする時があります。眼鏡をかけると頭が悪くてもよく見えるかもしれないから。」

「まぬけって…」

「文句があるならお菓子抜きにしますよ。」

「かけます!!! かけさせて下さい!!!!」

真琴は眼鏡をうけとるとトイレへと行くのだった。

「全く、紙の内容はふれないのに眼鏡はすぐに聞いてくるんですね。まあ仕方ないですが…。」

小崎は眼鏡をはずし

(…痛い子だが扱いやすい。見ていてあきない。…)

そう小崎には悩みがあったのだ。

今まで数々の人を採用したが小崎の指導がきつい為やめていく場合が多いのだった。

「今度の子はいつまで続きますかね。」

小崎は腕を組み、窓辺に立つのだった。

前途多難（後書き）

なにから物語をはじめたらよいのか時々悩みます・・・
できたら面白い感じにしたいのですが・・・。

表現が下手なもので・・・。

でもでもがんばっていきますので！！！！

ではでは続きのほう宜しくお願いいたします。

てんやわんや☆

真琴は長い髪をおさげにすると黒ぶち眼鏡をかけた。

トイレの鏡をみながらおかしな点はないか確認すると

「よし。」

と声を出し辺りを見回した。

「それにしても広いトイレ！私の部屋六畳だけどそれ以上広いよ。

なんかへこむな。」

トイレ一つに対し八畳。

この屋敷にはとどころどころに設置してあるのだった。

考えてみればここに初めて来た時第一印象はばかでっかい屋敷とか印象がなかった。

それにでかいだけでなく置いてある美品や家具もみたことがない。

一般庶民から見れば格の違いを思い知らされる様な感じがするくらい自分とは住む世界が違うと見れば見るほど感じてくる。

あまり見ない様にしようと思いつつながら真琴はトイレから出ようとドアを開けた。

ドンッ

「あ…。」

ドアを開けた瞬間だれかにぶつかってしまった。

真琴はドアの後ろを除くと、驚くほど整った目鼻立ちで小崎と張るくらいの美青年が無言でたっていた。

「ごめんなさい。そこにいると知らずに開けちゃいました…けがはないかな？」

真琴はトイレのドアを閉め青年に話しかけた。青年は口を開き

「問題ない。見掛けない顔だな…。」

青年は真琴を見回す。真琴は慌てながら自己紹介をするのだった。

「私、今日から働くことになりました。神野 真琴です。」

青年は目を細め、

「真琴…。」

とつぶやくと、

「ふむ。ここに働くことになったのだな?。」

と青年は真琴に質問をした。青年からの質問に真琴は首をかしげるが、

「一応…。」

と答えその答えを聞いた青年は口元に手を当て、

「たまに退屈凌ぎで散歩をしてみるのも悪くないな、いいものをみつけた。」

青年は真琴の腕を取り、

「私は退屈だ。相手しろ。」

「え…。」

真琴の目は点になるのだった。

「ちょっと」

真琴は青年の手を離し

「私お仕事中だし。それに…お菓子が…。小崎さんにばれたら怒られる…。」

青年は首をかしげ

「なんだ。お前お菓子が欲しいのか?」

真琴は顔をしかめ、

「そうお菓子…って違うよ。初仕事からさぼってたら首になっちゃう。」

（お菓子もあるけど…。）

真琴は苦笑いをしながら、一礼すると、

「では失礼します。」

とゆうと足早にその場を立ち去るのだった。

立ち去る後ろで青年がなにかいっていたが真琴には聞こえなかったのだった。

時すでに小崎は腕時計をみながらムスツとしていた。

「…遅い。いくらなんでも遅すぎる…。」

まさか迷子に…。ありえそうですね…。

「仕方ありませんね。」

小崎は部屋から出ようとドアを開けた瞬間。

「えっ!?!。」

「!」

ドカッ

「いったゝ。ごめんなさい。」

「…。」

真琴はいきおいよくドアを開けようとした時、ちょうど小崎がドアを開けた瞬間と一致し真琴の体は倒れてしまった。

「あー。またやっちゃった。」

「また?。」

小崎の額にぴきつと青筋が現れる。真琴は空笑いをしながら

「いや、あのトイレの時、ドアを開けたらぶつけちゃって…けががなかったからよかったんですけど。」

小崎は溜め息をつき

「あなたは落ち着きとゆうものがないんですか。後、学習能力も。」

「うっ…すみません。」

真琴は小崎のきつい一言にしゅんっと落ち込んでしまった。小崎は溜め息をつき

「けがしていませんね。」

「へ?」

そういえば倒れたのに痛くない。

真琴は半べそをかきながら小崎の方を向いた。

「いいかげん、どいてもらえませんか?。」

よくみると真琴の下に庇う様にして小崎が下敷きになっていた。

小崎の手が真琴の腰にまわっており、はたからみれば真琴が押し倒している状態だった。

真琴は顔を赤くして素早くその場を離れ何度も何度も謝るのだった。

てんやわんや☆(後書き)

なんか皆さんによんでもらい本当にありがとうございます。わかりにくいところか他の人からしてみれば
まだまだ未熟者です。少しずつ学んでいけたらうれしいです。

不安

「窓をきれいにお拭きしましょう♪タントントンタントントンタン。」
真琴は屋敷の窓をきれいに拭いていた。

ついでに歌を交えながら。

だが歌はずっと先に進む事なく同じところばかり歌うのだった。

長い廊下を一人せこせこと窓拭きをしながら真琴のわけわからない歌は響くのだった。

だが真琴の顔は段々と暗くなって行くのだった。

はあ：私小崎さんに嫌われただろうな：。きっと後悔してる：。

歌いながら考える中

「ねえ。君のその歌の元は。母さんお肩を叩きましょう♪から作ったんだよね？」

突然背後から話しかけられ真琴は勢いよく振り替えるのだった。

後ろには優しい雰囲気を持つきれいな男が立っていた。男は真琴にほほ笑みながら、

「侯硯コウリユウと話してたんだ。この歌の元は何かってね。僕たち意見が合わないから歌声の主に聞こうと思ってね。」

「あ：。」

真琴は照れ笑いをしながら、

「実は適当で：。思い付いたら歌っちゃう癖が合ってたなんの歌か考えてないですよね。」

真琴は昔っから暇になると歌い出すお気楽な子だった。男はくすくす笑いながら、

「面白い子だね。僕は初音。ハツネ」

初音は手を出し真琴は笑顔で手を握り握手を交わす。

「私は神野真琴です。」

初音は優しいほほ笑みで、

「では可愛らしいメイドさん。僕とお茶でも飲みませんか？」

「えっ？」

初音は窓の外をみながら、

「今日は外がいいかな：天気もいいし。きっと気持ちがいいだろうね。」

真琴は暖かいお日様のしたでお菓子を食べる想像をした。

「いいですね。」

真琴の一言に初音はほほ笑むと、

「じゃあ、決まり。あっ小崎さんから、今日の仕事は終わりだからって伝言預かっているよ。でも今日の締めくくりとして神野さんにおいしいお菓子とお茶を用意してもらっていいかな？」

「：はい。」

小崎の名前を聞くとなんだか考えてしまう自分に真琴は笑顔でごまかした。

「じゃあ、私用意してきますね。」

真琴は一礼をするとお茶の用意をしに厨房へと行った。

初音は笑顔で手を振った後、真琴の姿が見えなくなると振った手を降ろした。

「お前は女に優しいな。初音。」

「：随分人聞きの悪い言い方ですね。侯疏。」

初音の後ろから見たこともない美しい男性が現れた。

なめらかな白い肌。

唇の形から目までこの世のものとも思えないくらい完璧なものだった。

肩にかかる髪感じも美しく冷たい目を感じさせるがそれもまた魅力的な雰囲気漂わせていた。

侯疏といわれた男は手を伸ばし窓にそつとさわる。

「きれいに拭いてあるな：。」

初音は侯疏を見ながら、

「珍しいですね：。あなたが部屋の外に出て来るなんて：。」

そう侯疏はその姿があまりにも完璧な為、あまり人に姿をさらすこ

とはなかった。彼は自分の姿が嫌いだったのだ。

侯疏はすつと口を開く、

「あの娘…。」

「神野さんがどうかしましたか?。」

侯疏は口を閉ざし、

「やはり何もない…。」

とゆうと部屋の中へとまた入っていった。

薄暗い部屋の中で侯疏は瞼を閉じた。

目に浮かぶのは小さな少女…。自分の姿を見てもためらわず懐いてくれた。

：どうして? お姉ちゃんはそんなにきれいなのに隠すの?…

昔からこの姿が嫌いだった。

周囲の見る目。

まともに話す事もできずほとんどの人が呆然としてしまう。

中には同じ男なのにやな目で見るものも多くはない。

そして女は自分の顔と比べ引け目に感じやっ和本命が現れても恋愛すらできないでいた。

そんな時に少女は笑顔でこうもいつていた。

：お姉ちゃんとゆう人は一人しかないんだよ。

私はお姉ちゃんと出会えて嬉しかった。

私が大きくなったらお姉ちゃんをお嫁さんにするからね…。

女同士でなぜ結婚ができようか? でもあの時の小さな少女の言葉で彼の心は救われたのだ。

自分の姿を見てそうゆわれたのは初めてだった。

あの頃から小さな少女とは出会っていない…。

侯疏は瞼を開くと部屋からでていくのであった。

お茶会

「神野さんがいれる紅茶はおいしいですね。」

真琴はお菓子を取り皿に分けながら、

「本当ですか？ありがとうございます！」

分けた取り皿を初音に渡した。

「僕はうそはつかないよ。いや、つけないといった方が正しいんだろうね。」

真琴はカップに自分の分を注ぎこんだ。

初音様はこの次男で侯疏様が長男らしい…。
そういえばまともに説明がされていなかった。

「神野さんはなぜそんなに働くのかな。」

「？。」

初音はカップを起き、

「余計な事聞いてごめんね。君が面接の時たまたま通ってね。その時かけもちがどうか聞こえてしまったんだ。」

真琴は笑いながら

「気にしないでいいですよ。」

真琴はカップを手にとると

「私：家をでたいんですよ。」

真琴は紅茶を一口飲むとカップを置きお菓子を口にする。

「そっか…。」

「食べ物巡りでもしようかな！って感じで。」

真琴は笑いながら質問に答えた。

初音は取り皿を真琴に渡すと

「僕の分も食べていいよ。」

「本当ですか？」

真琴は喜んで受け取った。初音は真琴をジッとみつめ

「神野さんは不思議な子だね…。」

「？」

初音は真琴から目線を外し

「窓拭いているときね。君の姿を見た時、泣くのかと思った…。」

「…。」

真琴の手が一瞬止まった。

「声を掛けたら何ごともなかった様に一瞬で表情が変わって…。」

「見間違いですよ！！初音様たら！もうお菓子が食べたくて食べたくて仕方なかったんですよ！」

真琴はお菓子を持ち

「知ってますか？ここのお菓子！数々の賞をとっているんですよ！これが毎日食べれるなんてもう夢みたいで…。」

初音は苦笑いをしながら、

「じゃあ今度おいしいものでも食べさせてあげるよ。おすすめがあるんだ。」

真琴はパアツと顔を輝かせながら

「ありがとうございます！！。」

と感激するのだった。真琴は紅茶を見ながら

「この後小崎さんにもお茶を出しに行こう…私ずっと小崎さんに迷惑ばかりかけてるんですよ。」

初音は横になりながら、

「小崎さんはね、不器用な人なんだ。本当はだれよりもいろんな事を理解して気を使って…。」

「わかってます。」

「えっ」

初音は起き上がると真琴の横顔はとても穏やかに見えた。

「私小崎さんとはまだそんなに日が経ってないけどなんとなくだけど…。」

初音は空を見上げ

「その言葉、小崎さん聞いたら喜ぶと思うよ。」

真琴は紅茶をふたび注ぎながら笑ってごまかすのであった。

：

：

「だめです。」

「なぜだ?。」

小崎の執務室には侯硫が尋ねていた。

小崎はこめかみを押さえながら

「やめてもらってはこまるでしょう?。」

「小崎のどこにいても同じだと思うが。」

ムスッ

侯硫の一言に小崎の目が細くなる。

「とにかく…だめです。」

「…。」

「…。」

「…。」

侯硫は口を開き

「なぜあの娘にそこまでこだわるのか…。」

小崎は眼鏡をはずし

「こだわってないません。こだわっているのはあなたの方でしょう?。」

小崎の一言に侯硫は薄笑いをし、

「そうかな…。」

小崎は眼鏡を机の上に置く。

「珍しいですね。あなたが人に興味をもつのは…。」

侯硫は目を閉じる。そのしぐさもまた優雅にみえた。

「興味か…そうかもしれない。」

「!?。」

二人の会話はずっと同じ内容を繰り返していた。

「こっちはお金を払って雇っていますからそっちな人も人がほしいなら求人をとればいいでしょう。」

その言葉に侯疏は

「なら倍額で彼女を雇うとしよう。」

小崎のこめかみに青筋が浮き出る。

小崎は部屋のドアへ歩きだす。

「神野さんは頭が悪いんです！！あなたの役にはたちません！！！！
私が保証します！！！！」

そしてドアを開け

侯疏に向かって

「お引き取りくだ…。」

というとした言葉が止まってしまった。

ドアの前には外にいるはずの真琴と初音の姿があった。

小崎の顔は驚きを隠せず、侯疏は溜め息をつく、真琴は笑いながら、
「すいません。なんか聞くつもりなかったんですけど入りづらくて
なんか…はは…私。」

声が震え徐々に表情にゆとりが無くなっていくのが真琴にもわかった。

「私急用を思い出したので帰ります。初音様…お茶ありがとうございます
いました！お疲れ様です。失礼します。」

真琴は一礼すると顔をみせず走ってその場を離れるのだった。

それを見た侯疏は

「役に立つかどうかは私が決める…。」

そうゆうと部屋からでていくのだった。

変質者

「今のはよくないですね…。」

初音はテーブルにお茶を置くと

「珍しいですね…あなたがそんなにむきになっているのは…。」

「…。」

小崎はイスに座り、考え込む。

まさかあの時、話を聞かれているとは思いませんでした。

珍しく侯疏様が訪れたと思ったら自分でも予想できない用件だったのだ。

…あの娘に仕事の手伝いをしてもらいたい…

侯疏は25歳にして独立で会社を建て今ではこの屋敷に閉じこもり黙々と仕事をこなしている。

補佐として初音が。

仕事はともじやないが簡単な内容ではなかった。

そんなきつい仕事を真琴にやらせるのは小崎は避けたかった。

「…らしくありませんね。すいませんでした。」

初音は紅茶をカップに注ぎながら、

「彼女いてましたよ。小崎さんには迷惑かけてばかりで申し訳ない。小崎さんにお茶をつぎたいってね。いい子ですね。」

「…そんなことわかっています。」

初音はカップを机に置くと、

「ねえ小崎さん。あなたの想い人ってあの子だったりして…。」

初音の質問に小崎は口を開く。

「あなたには…初音様には関係ないことです。」

小崎の声が部屋に響く。

「それもそうだね。…でも女の子には常に優しい態度で示さなくてはね。」

「私はそこまで器用ではありません。」

初音は小崎の肩をポンつとたたき

「そういえばね、駅の近くのババリーとゆう店のケーキがおいしいんですよ。神野さんおすすめだとか。」

「。。。」

初音はほほ笑みながらドアにむかい、

「じゃあぼくはこれで。誤解を解いてくださいね。」

初音は部屋から出て行ってしまった。

小崎は溜め息をつき、少し考えると部屋から出て行くのであった。

：

：

：

「なにやってるんだろう。。。」

真琴は家の鍵を開け中に入る。

「ただいま。。。」

家の中で真琴の声が空しく響くだけだった。

真琴はくつをぬぎ、リビングに荷物を置くと座り込んだ。

「また今日も迷惑かけて怒られちゃった。しかも役に立たない保証付き。いやゝ小崎さんわかってる。」

真琴はうつぶせになると眼鏡がないことに気付く。

「やだ：私どこになくしたんだろう。」

あの時は無我夢中でここまで走って。眼鏡落としたの気付かなかった。

目が熱い：。真琴は目を閉じようとした。

ピンポンッ

真琴はインターホンの音に頭を上げる。

だれかが玄関のインターホンを鳴らしているのだ。

真琴は立ち上がると玄関へと向かいドアを開けた。

「どなたです：！。」

真琴は反射的にドアを閉めようとしたがドアに手が掛かる。

手はドアをこじあげ真琴の力では閉めれなかった。

ドアは開けられその外には見知らぬ男が入ってきた。

真琴は部屋の中へ逃げようとしたが男につかまり真琴の体は倒れる。

「いっ…。」

真琴は頭から倒れ意識が遠のいてしまう。

意識がうすれるなか男が笑っている姿が微かに見えたのだった。

ドカッ！

「うが！？」

男の頭に衝撃が走る。何者かが男の頭を蹴り飛ばした。

「薄汚い野郎が…。」

男の目の前に恐ろしい顔をした小崎が立っていた。

小崎はつかみかかろうとした時男は悲鳴をあげながら部屋の奥へと逃げようとしたが襟をつかまれきれいな弧を描く様に一本背負いされたのだ。

ドカンッ

小崎は渾身の力で投げたのか男は背中を強打し気絶してしまった。

小崎は一呼吸すると真琴の安全を確かめた。

真琴の顔色は優れないが気絶しているだけなのを確認した。

小崎の表情は安心すると警察へと連絡するのだった。

変質者（後書き）

やっていくうちに登場人物の想像していたのと人格が
かわっていったような・・・。

ちなみに私は携帯からここにアクセスしています^^

携帯だと私のは機種が古いので入りづらく文章がパソコンとくらべ
るとなんか違うな。と思う今日この頃・・・。

なんかこれから主人公をどう行動させようかと悩みます。

誰とハッピーエンドにさせようかと☆

それは教えませんが・・・。やっぱり読んでる人から見ればこ
の人がいいとかでてくるのかな？

私はこの人とハッピーエンドになればいいのにと出てくるタイプで
す☆でも結末をってしまうのはなんか損な気分ですよね。これか
らもがんばりますので心からの応援の方、宜しくお願いいたします

^^

一難さってまた一難（前書き）

読んで頂いてありがとうございます*^_^*
これからも頑張っていきたいと思しますので
宜しくお願いいたします。m (_ _) m

一難さってまた一難

深い深い夢の中。

真琴は小さい頃の夢を見た。お菓子につられ誘拐されそうになった時のことを。

：やだ、離して、

無理やり連れ去ろうと男は真琴の腕をひっぱる。

その時真琴の体は宙に浮き、男から体が離された。男は真琴から離れ逃げていった。

よくわからない。

わかるのは青年が助けてくれたことだけ。泣きじゃくる真琴に青年はほほ笑みながら

：ケーキあげるから泣かないで。

真琴は青年に涙が止まるまで慰めてもらった。

でも一番悲しかったのは帰ってからそのケーキを両親に取り上げられたこと。

：

：

：

ピチャ

「ん。。。」

重い瞼を開けると額に冷たいタオルが置かれていた。

「目が覚めましたか？。」

真琴の横には心配な表情を浮かべ見つめる小崎の姿がそこにあった。

「小崎さん？。」

まだ目が覚めたばかりか今の状況を理解できない真琴に小崎の口から説明をする。

「あなたは男に気絶させられ、そこに私が居合わせたんです。」

小崎の説明を聞きながら真琴はなにかを聞くことはなかった。

いつもの元気がないことに小崎も内心、落ち着けない。

真琴が何を考えているのかわからなかった。

そんな小崎に真琴はつぶやくように一言一言話し出した。

「…私。」

真琴の目から涙がこぼれ落ちるのを小崎は見ていた。それでも真琴は話そうと口を開く。

「私…だれか確認しないで…ドアを開けて…。…小さい頃も自分のせいで誘拐されそうに…。小崎さんの言う通り…。本当に…学習能力なくて…。」

真琴の声は段々小さく消えてしまいそうなくらいになっていく。見ているこっちが痛々しく思うくらい。

「ごめんなさい…。」

真琴は瞳を閉じそれ以上言葉を発することはなかった。

不意にベットの端に体重がかかってきていることは今の真琴にはわからなかった。

真琴の頭に暖かいものを感じた。

小崎が優しく真琴の頭をなでているのだ。

小崎は真琴から手を離すと弱々しい声で話し出した。

「…謝るのは私の方です。」

小崎は真琴の涙を優しく拭く。真琴は瞼を開け小崎の顔を見つめた。

「あの時…私は、自分の事しか考えていませんでした。あなたをあとに渡したくないばかりに…。そしてその結果あなたを傷つけた。」

「小崎さん…。」

「あなたはなにも悪くありません。」

真琴は体を起こす。小崎の哀しい表情に真琴の胸が痛むのは気のせいだろうか。

「…そんな顔しないでください。私…正直、小崎さんの顔みたら安心してて…そしたら涙なんか出しちゃって…恥ずかしいです。」

真琴は照れ笑いをしながら小崎に笑顔を向け

「私お仕事、頑張ります。」

なにをいったらいいかわからなかったが小崎の顔は優しくほほ笑んでいた。

「ケーキ買ってきたんです。良かったら食べて下さい。」

小崎の言葉に真琴は目を見開き

「ケーキですか!!!!。」

真琴は小崎からケーキを受け取ると

「ありがとうございます!!!! いただきます!!!!」

真琴は幸せな顔をしながらケーキを食べるのであった。

さっきの深刻な雰囲気から一転。

今ではそんなことがなかったかのような感じになったのだった。

「おいしい!!」

真琴はケーキを食べ続けていると

ドッドッドッド

なにか近付いて来る足音が聞こえたかと思うと

バンッ

「真琴!!!!!!」

「ふぐっ!!!!!!」

中に入ってきたのは慧だった。

真琴はケーキが喉につまってしまう。

慧は真琴の顔を見て安心をするが横にいた小崎に目を移す。慧は小崎を見て、

「お前：っ!?!。どうしてここに。」

「あなたこそどうしてここに。」

二人は睨み合う。

真琴は水を求めるが二人の視界にはうつらなかった。慧は見下しながら

「まさかまたお前に会うとは思わなかった。」

小崎は冷静に話す。

「あなたとは二度と顔を見ることもないと思っていましたが。」

ピキッ

慧のこめかみに青筋がうかぶ。

「なにしに戻ってきた、真琴はやらねーぞ。」

「たまたま、私が働いているところが一緒だけです。」

「たまたまたまたま、いえばいいとも思ってるんじゃないだろうな。ストーカー。」

ピキッ

今度は小崎のこめかみに青筋がうかぶ。

「たまたま働いているところに、たまたま人手が足りなくなり、たまたま募集をかけたら、たまたま彼女が面接にきて、たまたま受かったんですよ。」

「…みっず。」

「たまたまたまたま、うそくせー!!」

真琴の言葉は慧の言葉に打ち消されるのだった。

「そんなに疑うのなら本人に聞けばいいでしょ。」

小崎の言葉に慧は真琴に近付く。

「真琴!!!! 本当なのか??。」

「みっみっ」

真琴はもう限界だった。慧ははっきりいわない真琴にいらいらしながら、肩を揺さぶる。

「真琴!!!! こいつをだれだかわかってんのか!!!!? お前小さい頃ひどいことされてたのに!!!!」

「神野さん、私のこと気付いてませんよ。いや、覚えてないのかな。」

慧は真琴から手を離す。真琴は目を回す。

「なにがなんでも思い出させてやる、そしたら真琴はお前なんか近寄りたくなるさ。なっ真琴…。」

慧が真琴に呼び掛けた時には真琴は青ざめた顔をして気絶しているのであった。

一難さってまた一難（後書き）

この作品少し遅れて出しました←なぜかというと
携帯に残しといたのに携帯本体の中身が初期化してしまい・・・
。またやり直しという形になりましてTOT 泣
友達とかの番号もなくなってしまいへこみました。
どうしてそうなったかはまた話が長いと思いますし
また聞きたい人とかがいたらお話したいと
思います^^

犬猿の仲☆

「ふわぁ〜。」

真琴は眠い目をこすり、ベットからむくりと起きる。

カーテンを開けるとまぶしい眩しい朝の陽の光があたり、とても心地よかった。

真琴はふと時計のほうに目がいく。七時半。昨日のこともあって今日は二つとも仕事は休みになった。真琴的には休むつもりはなかったが、小崎と慧の判断で、今日は一日休むようにいわれたのだ。真琴は本棚にあるアルバムを取り出し、小さい頃の写真を見だす。

昨日、ケーキが喉につまった後、やっとの思いで飲み物を与えてもらった真琴は二人が言い合っている話の内容など聞いてもいなかった。慧曰く、小崎は自分が小さい頃、会ったことがあるどころか、自分が小学生の頃に身近にいたらしいのだ。

「覚えてないわけじゃないけど・・・。」

真琴はアルバムをめくり続ける。そして小崎曰く、思い出すまでいうつもりはなかったんですが、仕事に影響があるといけないので・・・。といっていた。慧は、こいつは真琴に酷い事をしてきたと訴えていた。それに対し、小崎は、愛情表現ですよ。と笑っていた。

「あっ・・・。」

真琴はある一ページに目を止めた。そこには、泣きながら写る自分に優しく微笑みかける青年と慧が写っていた。

「これだ・・・。」

真琴は小さい頃を思い出した。この頃、真琴はよくこの青年に遊んでもらった。

男の子に手紙をもらい、読もうとしたとき、この青年によく「これは不幸の手紙だから。」

とあずかってもらったり、帰りにクラスのいじめっこの男の子に呼びかけられたときもこの青年が迎えに来て助かった。誘拐されそう

になった時も助けてくれた。休日もよく相手してもらって……。でも、親の仕事の事情で引っ越すことになり青年とは会えずじまいだったのだ。

そして最近、またここにもどってきた理由は真琴の両親は交通事故で死んでしまった。真琴もその車に乗っていたが幸い、まことだけは軽い怪我ですんだが、両親は真琴をおいてなくなってしまったのだ。ここに引っ越したのは慧の要望もあり、一人で不安というのもあったので、ここにもどってくることにしたのだ。でもいろいろあったせいか、この青年が小崎だとは思いつかなかった。雰囲気が違うのもあるのだろうか。そして慧は、小崎に対してすごく嫌悪を感じていた。犬猿の仲みたいだ。小崎が前だれかににているといったのは慧のことだったことを思い出す。

「この頃からたしかに仲が悪かったな……。」

真琴はアルバムを閉じ、再び本棚に戻した。

慧がいつていた言葉を再び思い出す。「こいつは、お前を独占するどころか独り占めして、男が近寄らないように見張っていたんだぞ。」

「眠い……。」

真琴は目を再びこすり、慧の言葉はもう頭に入っていなかった。

時間は戻して昨日の夜。真琴が眠ったのを確認すると起こさないように二人は帰ることにした。門から出ると慧はふたたび小崎に話しかける。

「お前……真琴に近づくなよ。」

「そういわれましても、嫌でも向こうから近づいてきますし。」

「真琴は鈍感だから気づかないだけだが、お前がなにげに真琴が小学生の頃にしてきたことはそこの男から見れば迷惑なんだぞ。」

「感謝してるくせに……。」

慧は気まずい顔をさせて、

「とにかく、お前が不幸の手紙だからといって奪った手紙がラブリーターなもの、真琴のことが好きで苛めていたガキ大将から真琴を遠ざけていたことも、男がかかわるところに真琴を行かせないように仕向けたことも俺は知ってるんだからな。」

小崎は不敵な笑みをうかべ、

「おかげで彼女は今だ恋をしたことがない・・・。」
「う・・・。」

小崎の言葉に慧はつまってしまふ。

「まあ、偶然にもよかったじゃないですか。彼女その手はもとかから鈍いようで私がどうこうしなくてもよかったみたいです。それに・・・。」

小崎は慧を横目で見ると、

「私がしていなかったら、あなたがしていたでしょうしね。」
慧は反論する。

「俺はお前のようにはない。」

小崎は眼鏡を掛け治すと溜息を出す。

「知ってますよ。彼女の家に同級生が来そうな時を見計らって、食べ物で彼女を釣っていたの・・・。」
どきっ

慧は半場苦笑いをしながら、

「さて、おれはそろそろかえろうかな。仕事もあるし。」
「・・・。」

そんな慧に小崎は冷たい視線を浴びせる。こうして二人は真琴の家から離れていったのだ。

でもそんな話をしていたことも真琴に知る由もない。

昔っからの癖

「……なんだか気まずい。」

真琴は窓拭きをしながら溜息を付いていた。一昨日起きた変態騒ぎでいろんなことが起きすぎて真琴の頭の中は混乱していた。

初音さんと一緒に小崎の元へ行けば、役に立たないといわれるし・でもそれは小崎さんがちゃんと謝ってくれたし・私を離したくないようなこと言ってたけど、それ程ここは人手が不足しているんだろうな……。そして変態は現れるし・でもそれは自分の不注意で……。小崎さんに助けてもらったからよかったんだけど……。寝顔や泣き顔を見られたし……。あの時はもう安心しちゃって……。

その上、慧兄とは犬猿の仲……。しかも小さい頃にお世話になってるのに私気づきもしないで……。

「はあ……。」「

最悪だ……。

「どうしたの？」

「ひっ!!!!!!!!!!!!!!」

真琴は考え事している中、話し掛けられ体が強張った。恐る恐る振り向くとそこには初音の姿があった。

「どうしたの？ そんな声出して。おどろかせちゃったかな。」

初音の言葉に真琴は両手を振り、

「いえいえ!! 私を考え事してたもので。びっくりしちゃって。」

初音は少し考え込み、笑顔で

「小崎さんのことだね。」

「え!!!!!!!!!!」

なぜわかるのか不思議な顔をさせている真琴に初音はくすくす笑いながら、

「だってずっと考えてること口に出てるよ。ちなみに僕は全部聞い

ちゃったんだけどな。」

「!!!!!!!!!!!!!!?」

初音の言葉に真琴の顔色は変わっていった。

初音は真琴のころころ変わる表情を楽しみながら

「大丈夫。誰にも言わないから。安心して。」

「・・・・・・はい。」

初音は腕時計を見ながら、

「そうだ、そろそろ時間だからお茶でもどうかな。」

「お茶ですか・・。」

真琴は少し考え込む。本日、小崎とは一回も顔をあわせていない。

でもあの事件があった日帰り際、明日は休むように、後、明後日は仕事が終わったら私が帰り送りますから。っといわれたのだ。

後ろで慧が叫んでいたが小崎が連れて行ってしまったので何を言ってるかわからなかった。

そんなことよりもここでお茶をしたら小崎のいったことを無視するかたちになってしまう。

でもかといって会いづらい・・・・・。

「だめ?せっかくおいしいお菓子が手に入ったのにな・・・・・。」

初音の優しい甘えた顔に普通の人ならいちころだが真琴はお菓子と
いう言葉に我に帰り、

「もちろん、行きます。」

はっ!!!!!!!!!!!!!!

やってしまった・・・・・。

真琴は茶菓子に釣られ迷うことなく即答するのだった。

母さん・・・・・・私はほかです・・・・・・。
だって・・・・・・。

またお菓子に釣られました。

「だね。」

「とほほ。」

初音の笑顔に段々自分自身が情けなくなってきた真琴であった。考えてることがずつとさつきから口に出ていることなど真琴に知る由もなかった。

それはそれで聞いている初音は最初はちゃんと口に出ていることをいったがその後はその後で、それはそれでおもしろいと本人に伝えることはなかった。

真琴の落ち込みように初音は、

「大丈夫、小崎さんにちゃんと僕から伝えたから。」

「本当ですか。」

「もちろん。」

「なんだ。」

真琴はほっとしたのかお茶を口にした。

「なんていいましたか。」

小崎の目付きが鋭くなった。その理由は初音の一言、

「真琴さん、預けさせてもらいますね。」

繰り返し、初音は小崎に伝える。小崎はこほんつとせきをする、

「どうしてですか？」

初音は笑顔で答えた。

「あの子、考えてることが口に出ちゃうんだね。」

「・・・・・・・・。」

小崎は嫌な予感がした。

「今日の彼女はずっと悩みを口に出しているもんだからね。」

「・・・・・・・・。」

やはりか……。

小崎は深い溜息を漏らす。彼女の事だ、何か気にするだろうとは思っていたが、むかしっから考え事が口に出る癖が直っていない。

「普通そんな癖ないだろう……。」

「？」

「いえ、独り言です。」

小崎は気分を入れなおし、口を開く。

「初音様……いくら悩んでいるとはいえ、メイドに気を使う必要はないですよ。」

小崎の言葉に初音は目を細める。

「おや、そういう小崎さんもあの子のことになると感情的になると思うけど。」

「……。」

「それに……彼女……小崎さんに会いたくないって……。」

「え……。」

小崎の顔が青白くなっていく。初音はくすくす笑いながら、

「じゃあ、これから僕は、彼女とおいしいお茶をしに行くから。」

つというと部屋から出て行った。

小崎は呆然として言葉も出ないのであった。

「やりすぎたかな……。」

「えっ？」

初音の言葉に真琴は反応する。

「いや、なんでもないよ。」

「……。」

でもこれくらいいいですよ。ちょっとは反省してもらわないと……。

初音がそのように言っていたことなど真琴には思いもなかった。

二人はおいしいお茶の時間を過ごせたのであった。

複雑な関係？

「神野さんの入れるお茶は本当に美味しいね。」

初音はお茶を味わいながらしみじみそう感じた。

「ありがとうございます。いつでも作りますから遠慮なく言って下さいね。」

真琴は初音の言葉に喜んでいた。愛くるしい真琴の表情に初音は自然と微笑む様になっていた。

「初音・・・こんなところにいたのか。」

「・・・候疏。」

浸透するような声、どこか甘く聞きほれてしまいそうな声の持ち主が真琴の前に現れた。

真琴はどうしたらいいかわからず、あたふたしていると初音は微笑みながら、

「あなたも頂きますか？なかなか美味しいんですよ。」

「え！！！！！？」

初音の言葉に真琴は混乱してします。

初音様ならまずくてもおいしいといってくれそうだが、候疏様は物事をはっきりいいような感じがする。。。

半泣きになっている真琴に初音は追い討ちをかけるように、

「候疏は正直者だから。」

「はう！！？」

またしても考えを口にしてしまう真琴だった。

「私は初音のように世辞でもいわないが・・・ひとつ頂こうか。」
候疏はひざをつき正座をした。

「はい。」

真琴はあわてながらもお茶をカップに注ぐと候疏に手渡した。

候疏はカップを受け取ると優雅にお茶を頂いていた。

あくまでいいっていわれたら。お茶のたびにでも出ようか・・・

真琴は真剣に思っていた。

「・・・・・・・・・・」

候疏はカップを皿に戻すと、真琴のほうを見た。

真琴はどきどきしながら候疏の言葉を待ち望んだ。

候疏のきれいな口元が開く。

「美味しかった。自信を持つことだ・・・」

「・・・・・・・・」

候疏の言葉に真琴は呆然としてしまった。

「あ・・・ありがとうございます!!!!!!」

真琴は嬉しさのあまり満面な笑顔を候疏にむけた。

「神野さんよかったね。」

「はい!!」

初音も真琴の喜びを見て微笑んでいた。

「神野。。。」

「？」

候疏の口から真琴の名前がでてくる。

「はい？」

「しばらく私の仕事の手伝いをしてはくれないか？」

真琴はきよとした顔で候疏を見ていた。

「雑用になってしまいが。午前は小崎の方を午後は私の方を手伝っ

てほしい。」

「・・・あの。小崎さんはなんていってましたか？」

候疏は不敵な笑みを浮かべ、

「了解は得ている。心配しなくてもいい。」

「・・・・・・・・」

真琴の不安げな顔に初音は、

「安心してお菓子はちゃんとあるから。」

どき

真琴は内心驚いたがどっちかというところ小崎の事が気になっていた。

「兄さんたちが集まるのは珍しいな。」

「……朔。」

後ろから現れた美少年は微笑みながら近づいてきた。

「あ!!!!!!!!!!!!!!」

思わず真琴は叫んでしまった。その美少年はトイレでぶつかった少年だったからだ。

真琴の反応に朔は、

「覚えててくれたんだ。あの時は寝ぼけてたから逃がしてしまったけど……今日は遊んでくれるのかな？」

「朔……神野さんはだめだよ。」

初音はどこか厳しかった。

「兄さんたちはいいんだね。」

「……」

何か気まずい雰囲気になっていた。

「神野さんそろそろ時間です。お片づけしましょうか。」

「え？」

時計を見ると4時をまわっていた。真琴はあわてて立ち上がる。

「やばい!!!!!!!!!!!!!!」

真琴はあわてて片づけをはじめた。

「お茶……僕は飲めないんだ……」

朔の落込んだ顔に真琴は胸を打たれた。もうお茶はなく真琴はふと思いつき、

「そうだ！今度お部屋にお茶もって行きますね！！」

「本当に？」

「はい！！」

真琴の言葉に朔は喜び、

「約束だよ。」

そういうとその場からはなれていった。

「……」

初音と候疏は顔を見合わせ、ため息をついた。

真琴はそんなことも気づかず後片付けをてきぱきとこなしていった。

「神野さん・・・」

「はい？」

初音は真剣な表情で真琴を見ていた。

「どうかしたんですか？」

初音は口を開け、

「朔には気をつけたほうがいい。今のあの子は君みたいな若い子が近づくのはあぶないよ。」

「????？」

真琴はわけがわからず二人の顔を見ると向こうのほうで。

「神野さん!!!!!!」

「!!!!!!」

振り返るとそこには小関の姿があった。

さーーーーー

一気に血の気が引くのを感じた。忘れていたことが一気に思い出される。

気づいたときには真琴は小関に補導されていたのだった。

「見張っておいたほうがいいですね。」

「・・・・・・・・」

残された初音と候硫は肝心なことを伝えなかった。

「そんなことにはさせない。」

候硫の言葉に初音は驚いていた。

「珍しいですね。最近候流はあの子が来てから珍しいことばかり続いている。」

「・・・・・・・・」

「外にも出ない人がこうして外に出てきているし、仕事も任そうとしている。」

「・・・・・・・・」

候硫は部屋に戻ろうと歩き出した。初音はふと考え、

「あの子は、本当に不思議な子ですね。」

とつぶやいた。

複雑な関係？（後書き）

だいぶ遅れました←すいません・泣
理由を語らせてもらえばやる暇がなかった（ノ・。）クスン
が
んばります

喜怒哀楽

ああ神様……私はどうしたらいいのでしょうか……

神野 真琴 只今、おびえております。

え、なんでだって？それは……

「そうですか……私が怒ってるというんですね。」

「はう！！！」

神野の心の声はちゃんと小崎に届いていた。届いているというよりも口にでているので仕方ない。

小崎は眉間にしわをよせていた。

ここは小崎の仕事部屋である。周りは静かで静か過ぎて。

ああ。。元は私がやってしまったこと……お菓子につられたばっかりに……。

「……………」

半ばしゅんとしている真琴を見て小崎は

「私が怖いですか？」

「…………え？」

小崎の表情は少しせつなげに見えた。

どきっ

なんだろう……胸が苦しい……

真琴は自分がなにをいうべきかわかっていた。

「あの。」

「なんですか？」

真琴は顔を赤らめ、小崎に向かい、

「会ったらいわなきゃって思ってたんです。」

「……………」

小崎は無表情で真琴を見つめた。

「あ。。。。」

真琴は息を吐き出すように言葉を出した。

「昨日はありがとうございます！！私、たくさん小崎さんには助けももらって、しかも小さいときも遊んでもらってることも忘れてしまつて、あつ忘れたんじゃないです。まさかこんな身近に出会えるとは思ってなくて。」

「。。。。」

「うれしかったです。必要としてくれる小崎さんのその気持ちも温かいです。」

「。。。。。」

真琴は小崎に満面の笑みで微笑んだ。

「ありがとうございます。」

小崎は眼鏡をあげると

「大したことじゃありません。今日は私が送ります。また変なのがいるといけませんからね」

小崎の言葉に真琴は元気よく返事をしたのだった。

「あの小崎さん。。。。」

「はい。」

真琴は先ほど聞いた候疏からの話を思い出した。

「昼から候疏様の仕事を手伝うという話の件なのですが。。。。」

「。。。。ああ。」

小崎は真琴がなにをいうかわかっていた。

「使えないからだというわけじゃありません。人手が足りないので手伝うだけですよ。」

「そうですか。」

真琴はそれ以上聞かなかつた。前のような不安などはなかった。

小崎が自分を必要としてくれているのはすぐくわかつたし、ただ小崎からその言葉を聞けなかつたのが気になったのだ。

「気になりますか？」

「え。。。。？」

小崎の質問に真琴はきよとした顔になっていた。

小崎は口元を微笑ませながら

「私のことを覚えていないことを・・・私が気にしてるかどうかです。」

「!!?」

真琴の顔は一気に青ざめた。さっきまで気にはしていたがもう忘れていたのだ。

いきなりそれをいわれてあせる真琴に小崎は笑いながら

「あなたは昔からお菓子以外眼中にないので、面接のときもきれいに私のことを忘れているあなたを見て、やっぱりかわってないなあとと思いました。あなたは昔からかわっていません。」

予想してましたから気にしなくていいですよ。」

「・・・すいません。」

いいですよっていわれても気にしますよ。っと真琴は思っていた。

「神野さん。」

「はい・・・。」

小崎は外を指差して、

「あそこのケーキおいしいんですよ。」

小崎の指指す方向にはケーキやさんがあった。真琴はさっきまでの暗かった表情から一変、

ぱあっと華やかな表情へとかわった。

「今度いきます!!」

小崎は真琴の喜怒哀楽の激しさに微笑をかくせなかった。

「いまからいつてあげますよ。」

小崎はもう少し真琴のそばにいたいと思えたのだった。

ぶるぶる・・・ぶるぶる・・・

ベツトの上で携帯が鳴っていた。手探りで携帯を探し電話に出る。だれかなんてみていない。

「・・・・・・・・はい。」

寝ぼけているのか寝起きだからか声が低い。

「朔？ やつとでた・・・」

電話の主は女の声だった。朔は電話を耳に当てながらねそべる。

「ねえいますぐ会いたい。朔。」

「・・・・・・・・。」

朔の目が細くなる。

「朔、お願いよ・・・会いたい。」

「・・・・・・・・。」

電話の向こうの女性は徐々に泣いている声に聞こえたが朔の表情は冷たかった。

「愛してるのよ・・・朔・・・私・・・あなたがいないと・・・」

女性の言葉に朔の口元は微笑んだ。

「ねえ・・・」

「・・・・・・・・。」

「君は愛してるっていうけど・・・今の彼氏はどうしたの？」

「別れたわ。あなたがいいの・・・朔」

朔はベットから起きると、

「おしまいだよ。君とはもう遊ばない。」

「・・・・・・・・なにをいってるの？」

女性の声はわけがわからないといった感じでとまどっていた。

それでも朔はおかまいなく淡々と話し出す。

「さようなら。」

「いや!!!!!!? 朔!!!!!! いやよ!!!!!! 捨てないで!!!!!!」

女性の声は発狂していた。朔は表情ひとつかわらない。

「君さ・・・・・・・・遊びだってことを理解してよ。尻軽女の相手なんてもうあきたよ。」

「!!!!!!!!!!!!?」

なにか叫び声が聞こえたが朔はそのまま電話を切ってしまった。
ぶるぶる・・・・・・・・ぶるぶる・・・・・・・・

携帯は尚も震える。

「しつこいのは嫌いだ・・・。」

朔は窓を開け外に見える噴水に携帯を投げ込んだ。

「・・・・・・・・。」

外の空気を吸い込み朔は考えた。

「次探さないとなあ・・・・・・・・。」

お茶の約束

「これをまとめますか…。」

真琴は膨大な書類の山を見て唖然となった。

今日の午後からは侯疏様の元で働くのだが部屋に入れば書類の山に遭遇。思わず溜め息がでるほどの量だった。

「右下に番号がふられてるからこの番号の若い順番でまとめてくれるかな？」

初音は真琴に仕事内容をわかりやすく説明した。

「助かるよ。ちょうど人が不足しててね。会社でやればいいんだけど侯疏はここで仕事をする人だから書類が毎日大量にくるんだ。」

「はあ。大変ですね。」

書類のあまりの多さに呆然としてしまう真琴に初音は肩を軽く叩く。

「大丈夫？ ゆっくりでいいからわからないことがあったら聞いてね。」

初音の笑顔に真琴は少々ためらいはあったが深呼吸すると

「よし！ それではとりかかりますね！！」

真琴は黙々と作業に取り掛かるのだった。

「3時か…。」

部屋にいてもつまらない。

かといって今はだれかを呼ぶ気もないが呼びたくても携帯がない。朔はぶらっと屋敷内を歩いていた。

なにかおもしろいものはないかと。心辺りはあった。最近ずっと屋敷で雇う人は高齢か男ばかりだった。それは多分自分がちよっかいをかけるから小崎の計らいか兄のはからいかよくはわからないがそんなのはどうでもよかった。珍しく若い女を雇ったことを知りいつ

ものように遊ぶつもりなのだから。遊びあきたら捨てればいい。

「愛してるなんて言葉：口だけならなんとでもいえる。」

次はどう仕向けようか朔は考えた。どうやったらおもちゃを手なずけられるか。前は人のものだがちよつと甘い言葉をいうだけでなついてきた。人の思いははかない。少しきっかけを与えるだけでもろくもくずれる。

なにもしなくてもよってくる女も多かった。朔の容姿で近付く女はいつも耐えず遊んであきたら捨てられることをわかってでも引くものはいなかった。

朔の口元が微笑む。

その目線の先にはお目当てのものがいたから。周りを見渡すが兄達がないことを確認すると朔は女に近付くのだった。

「D 4 1：4 2：4 3：4：4：あれ見当たらない。」

真琴は膨大な資料の中一人でぼやきながら探していた。

「4 4：4 4：おかしいな：どっか紛れてるのかな。」

真琴が唸りながら探していると。

「4 4 ってこれ？」

部屋の窓から紙を見せている朔の姿があった。真琴は窓に近付き紙を見るとD—4 4と目次には記載されていた。

「これです！どこにあったんですか？？」

「窓の外の下に落ちていたよ。窓から落ちたんじゃない？」

「すいません。拾っていただいてありがとうございます！」

真琴は朔から書類を受け取ろうと手を伸ばした。

書類は真琴の手から遠ざけられる。

「ん？」

朔は書類をひらつかせ真琴が書類を取ろうともがいている姿を見ながら楽しんでいた。

「朔さん：取れないです。」

「頑張つて。」

「うー。」

真琴は手を一生懸命伸ばし書類を取ろうとするがとれなかった。窓から上半身を乗り出し手に書類があたった瞬間、真琴の髪がひっぱられた。

「いっ！！？ひゃっ」

真琴はその勢いで窓から落ちたのだった。

「いたたたた：」

「大丈夫？」

真琴を抱き寄せ朔が声をかけるが真琴は予想外の出来事に頭がまわらなかった。

「あまり意地悪しないで下さいよお。」

真琴は半泣きで朔に訴えた。

「あーはいはい。ごめんね。泣かないで。」

優しく頭をなでなでする朔の手が温かった。

「神野さんが可愛いから意地悪しなくなったんだ。」

「え？」

真琴は顔を赤らめ笑ってごまかした。

「あまりいわれないのでお世話でも恥ずかしいです。」

真琴は書類を手にとると

「じゃあ仕事なので失礼します。」

書斎にもどろうと朔から離れようとした。

ぐいっ

「う？朔さん？」

真琴の腕が朔の手によって捕まって離れることができなかった。

「どうかしました？」

真琴は朔の様子を伺う。

「お茶はいつももらえるんだろうと思って。」

朔の言葉に真琴はお茶の約束を思い出す。

「お仕事終わったらお持ちしますね。」

真琴は笑顔で返事をした。朔も笑顔で答え真琴に顔を近付ける。

「神野さんまつげにほこりついてる。」

「え？」

真琴は慌ててまつげにふれようとしたが朔がそれを遮る。

「僕がとるから目をつぶって。」

「え？」

真琴は返答する間もなく朔の指がまつげに触れようとしたので思わず目をつぶってしまった。

「何をしてる？」

突然の声に真琴は思わず目を開くと目の前に朔の顔が間近にあったので驚いてしまった。

声の主は侯疏だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2127a/>

脳天気娘

2010年12月23日02時16分発行